

Title	文藻
Author(s)	中井, 天生; 吉田, 鋭雄; 林田, 安平 他
Citation	懐徳. 1942, 20, p. 51-55
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/89091
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

文藻

祝壽說

中井天生黃裳

人壽如登高。登者以爲止處。休其勞而安其居。賀客行慶。以爲命之極。如是者。壽不長於此。我知壽醮畢。而命輒盡焉。知山嶺重疊。彌登而益高。幾不見其極處。賀客或不徒頌其壽。而更祝福其前途。氣彌進而壽益高。志業隨而成焉。余之見人壽。蓋若此矣。是以年益進。而不以爲高。獨恐志業之弗及已。昭和壬午年八十有八。懷德堂堂友會諸彥。迎余於洛北。設祝壽之宴。先是北山詞臺。傳招牒曰。祝福是不徒行賀慶。亦祝余之年益高。而志業隨成也。是得我意矣。錄謝渥愛。

八十八初度自壽作

同

皇天不罪我生涯。壽越先齡二又加。百歲曾存鷓鴣兆。將來冥運孰當家。

家祖壽齡履軒子八十六爲最高。起聯及之。鷓鴣止竹山子書齋。俗云入城城空。入室室空。作賦以解惑。後百年而天生生。結聯及之。

昭和壬午六月。懷德堂堂友會諸彥。迎余語書院舊事。賦以贈。

同

壬午夏天京洛會神通攝府舊鄉爨奠陰堂構朦朧見猶是同門同社情

奉壽黃裳先生

吉田銳雄北山

八秩今如八朱顏綠髮長道心如竹茂隱操似蘭芳神往嵯峨野身棲天樂莊正逢初度日祝壽獻霞觴

同 林田安平炭翁

鴨水東山映壽筵滿窓風物太鮮妍文壇耆宿人齊仰學德雙高不老仙

同 武藤甚東邨

家學相承筆有靈詩風文氣與年馨今茲八秩又加八矍鑠應期龜鶴齡

同 白井久吉文溪

洛師山上此開筵佳客盈堂橫瑞烟壽頌篇々催雅興群朋相會賀高年

同 酒井全鳴谷

純乎尙德井家馨。綠髮慈顏近百齡。壽海恢弘須養性。更加鶴算列文星。

昭和壬午六月念日。爲黃裳先生開壽筵于洛北洛樂園。席上聽書院舊事。

洛北清溪畔。高樓開壽筵。老儒淡舊事。興趣似斟泉。

仲田應弘

弟は歸還するなり佛壇へあげにゆきたり隊よりの菓子
父と母まつりてあればをがみるる弟の心おもひ耐へ難し
弟と幼き時に作りたる牀に涼みつつ月冴え渡る

音代節雄

此國土守らす神の荒御魂荒ぶる時に今しあひにけり
海行かば水漬く屍と言立てし祖の裔なり雄々し海の子
神國の空を侵しし敵機ありきその母艦を二隻沈めき (珊瑚海々戰)

民草抄 入江來布

畏さに億兆露に伏すはかり

聖恩仰けは爽涼の天高し
防人も草邊の民も露しと

大東亞天つちひろき秋となり
大東亞の野に山にする錦かな

○
高野にて五句

はれくと學文路の櫻秋風に
千里姫にあくる花なき秋の風
萩の花熊谷寺の微風かな
秋風に雉子のいしふみたつねけり
三寶鳥さく人いかに月夜かな

○
郊行吟

よろくと葦原にどんと船つきぬ
百日紅花こぼれ砂の寺淨し

村
上
楳
宿

日廻草驛夫會所の朝の空

智徳院にて

蓮紅し永徳の繪の前庭に
立秋や雲形かはる椋の空

雑詠

流雲吐月樹隴々

兩戸繰らで隣り静かや花の留守

何待娥眉長袖人

菜の花や月魂冴えて野を歸る

僕指平生感慨多

百日紅水の乏しき寺の庭

驛路鈴聲夜過山

稻の穂の朶み朝風斜めかな

花迎劔佩星初落(戦死)

惜しまれて逝く息^こや涙庭紅葉